

# ホフマンの作品にみる大学生像について

小崎 肇

## 0. 序

十八世紀から十九世紀の転換期はドイツ激動の時代である。フランス革命に続くナポレオンの侵攻、神聖ローマ帝国の消滅、対仏解放戦争という戦乱のなかで、政治と社会、文化の形態がめまぐるしく変化していった。この波乱の時代に若者たちを覆う環境も変化し、彼ら自身、時代の波に大きな刺激を受けることになった。この流れのなかに、ドイツの大学改革と大学生グループの変化があり、これまでにないさまざまな場面で注目を集めはじめる。

この同時代を生き、1816年以降はプロイセンの大審院判事として働いたホフマンが、そのあたりの事情に詳しかったであろうことは想像に難くない。彼の作品<sup>1</sup>ではしばしば大学生が採りあげられ、スポットライトを浴びせられているように、ホフマンにとって大学生は関心をそそる題材だったようである。

ここでは、ホフマンの作品に登場する大学生のサンプルをあげつつ、ホフマンが大学生から何を作品に取り入れ、何を提示しようとしたのかを考察したい。

## 1. 十九世紀にいたるドイツの大学と大学生

ホフマンの大学生像を考える前提として、まず十九世紀初頭の大学生像をまとめる。十四世紀半ばから十五世紀にかけて成立した中世におけるドイツの大学は、神学、法学、医学を中心とした組織だった。その後、十六世紀にかけて人文主義的改革が行われ、古典についての教養を習得することが一般化された。続いて宗教改革と三十年戦争によって領邦ごとの宗教的な分断が起こり、大学の分裂、統廃合がおこなわれた。そして、分断がようやく一段落ついた十八世紀のトマジウス、フランケ、クリスティアーン・ヴォルフによる

---

<sup>1</sup> ホフマンの作品からの引用は E. T. A. Hoffmann: Werke [in 5 Bänden, ohne Bandnummerierung], München (Winkler), 1960-1981. に拠る。以下、作品からの引用は FN 179 のように各巻タイトルの略記とともにページ数を本文中に示す。

FN : *Fantasie- und Nachtstücke*. SB : *Die Serapions-Brüder*. SP : *Späte Werke*.

ハレ大学での苦闘から始まり、フォン・フンボルト、シュライアーマッハー、フィヒテの理念にもとづく十九世紀初頭のベルリン大学の創立によって、ドイツの大学における近代化の核が完成するのである。<sup>2</sup>

この核はどのようなものなのか。そこには、主に二つの思惑のせめぎ合いがある。一つは、当時にわかにもてはやされるようになった「教養」(Bildung)理念と呼ばれるものである。もとは「教育」(Erziehung)とほとんど変わらない意味で使われていたものが、十九世紀に入り、ドイツ語圏で練りあげられた哲学や思想界の精神活動が収斂されていくのを背景として、徐々にその意味を狭めていった。<sup>3</sup> この言葉の厳密な定義は現代においても決着がついておらず、細かな差違にまでこだわるならば無数の解釈が可能となる。だが、敢えて「最大公約数的な考え方」の一例を挙げれば、ヴィルヘルム・リヒターの次のような要約がある。

各個人がそれぞれのかげがえのない個性を真善美の各面にわたって多面的かつ調和的に発展させ、自己完成の域に到達することを目指すところに人生の意義がある。<sup>4</sup>

このような態度に則ってより高次の人間としてみずからの能力を高め、発展させていくことが「教養」の目的として盛んに主張されるようになった。そしてこの言葉には、単なる思想界の流行をさすだけではなく、その裏にドイツ語圏の社会的な変化が隠されている。それまで高貴な身分と呼ばれていたのは特権階級としての貴族であったが、十八世紀の終わりに、高貴だけではなく〈教養を身につけた〉人びとという新たな表現が使われるようになる。このような呼び方から、血筋によって身分を保証されてきた貴族にくわえ、市民階級出身の学者や芸術家、高級官吏を含めた集団が社会的に認められるようになったのである。<sup>5</sup>

このように新しく登場してきた〈教養を身につけた〉集団は、その理念の広く曖昧な定義と同様に、明解な境界線をもって他の集団と分けられたのではない。しかしその受け皿であり、大部分のものたちの出身母体となったのが近代化されたドイツの大学であった。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの提唱によって1810年に設立されたベルリン大学をはじめとするその後の大学には「教養」理念が脈々と流れており、「学問イデオロギー」(Wissenschaftsideologie)<sup>6</sup>といわれるような学問に対する崇拝にまで達することになった。

このイデオロギーは「教養」理念にもとづいた人格の多面的な完成に特化するために、学問が何かのためのものではなく、純粹に学問のための学問を要求した。そのため功利主

<sup>2</sup> 島田雄次郎：ヨーロッパ大学史研究（未来社）1967、108頁参照。

<sup>3</sup> 野田宣雄：ドイツ教養市民層の歴史（講談社）1997、17~18頁参照。

<sup>4</sup> 同上、17頁。

<sup>5</sup> 同上、20頁参照。

<sup>6</sup> 同上、22頁。

義的、実用主義的な学問の運用を排斥し、大学における研究が個別のバラバラなものではなく、総合的な観点を踏まえ哲学的な思索をおこないながら、学問への献身と人格の陶冶を大学人に求めたのである。

このように教養理念が近代的大学の設立時に大きな影響を及ぼし、大学における研究、教育の明確な指針となっていった。しかし、ドイツの近代的大学の特徴はこの一面だけで規定することはできない。すでに述べたように、この思惑に拮抗するもう一つの勢力が存在したからである。それはまさしく学問イデオロギーが排斥しようとした功利主義的な考えの持ち主であった。すでに宗教改革以降の大学の分裂、統廃合には各領邦の君主たちの宗教的対立が背景にあり、大学には一定の自治が認められていたとはいえ、大学側に対する国家権力の介入は回避できないものだった。実際にハレ大学での政治学講座開設などに見られるように、国家の行政に直結する領域の教育、研究は必須のものとなっていた。

とりわけ、プロイセン政府の高級官僚たちを中心とした功利主義者たちは国家の重要な機関として大学をしっかりとコントロールしながら、官僚や聖職者、医師といった高度な専門技能をもった若者を育成する高等教育機関としての役割を大学に求めた。そして、入学してくる学生たちの大部分も「教養」理念に沿った純粋な学問を追究するというよりは、職業教育のための学校と大学をみなしていたのである。

こういった外部からの要請に対して「教養」理念をかかげた大学改革をめざす学者たちはある程度の譲歩を余儀なくされた。しかし、大学における哲学部の地位向上に見られるように、「教養」理念は確実に大学内での地歩を固めたのである。そしてこの二つの思惑が交差するなかで近代のドイツの大学では学生の教育だけではなく、献身的な研究活動をとおして自己を陶冶し学生の模範となることが大学教授の必須条件となっていく。

さらに二つの思惑が妥協することによって副作用がうまれた。実際にはほとんど「教養」理念に触れることなく実技や専門知識のみを扱い、実学として専門職につく者たちを送り出していった法学部や医学部といった専門学部も「教養」理念の恩恵を受けるようになったのだ。すなわち、これらの学部を卒業した高級官僚、裁判官、医者になった者たちも学問になじむことで〈教養を身につけた〉と認められ、人間的にすぐれた人格を磨いたとして社会的に高い評価を得ることができたのである。このような評価の積みかさねにより大学を卒業した、〈教養を身につけた〉人びとが新たに社会的身分として、さらには特権階級、エリートとして社会的に確立されていったのである。<sup>7</sup>

十九世紀初頭までのこのような大学改革と平行するように大学生という立場が大いに注目されるようになった。その事情は当時のドイツを取りまくヨーロッパ情勢とも関係している。十八世紀もほぼ終わりにいたるまで大学生といえば「前世紀の野蛮をそのまま受け継いだ」<sup>8</sup>者たちとみなされ、その素行の悪さばかりが話題にされた。それにくわえて、そ

<sup>7</sup> 同上、26~27 頁参照。

<sup>8</sup> ゲオルク・フィッシャー（中井臣久訳）：18 世紀のドイツ大学事情 [帝京大学第 2 外国

それぞれの大学において組織された学生団体は諸特権を濫用したために、国家権力からの禁令を誘発する悪名高い集団としか見られていなかったようである。<sup>9</sup>

この集団に転機がおとずれるのは 1789 年だった。フランス革命の一報はドイツの多くの知識人を魅了した。そしてそれは若者も同じであり、その後活躍する若きロマン派の詩人、思想家<sup>10</sup>を含んだ多くの学生がこの自由の革命に熱狂したのである。そして、その後続く革命からナポレオンの独裁への変貌とフランス軍の侵略、さらに解放戦争という時代の流れのなかで、大学生たちのなかに新しい自覚が芽生えていった。フランス侵攻によるライン以西の喪失と神聖ローマ帝国の消滅はドイツ語圏のナショナリズムの高揚をうながし、それに続く解放戦争には多くの学生たちも義勇兵として参加した。<sup>11</sup> 政治的不安定がむしろ学生たちの自立をうながしていったとも言えるだろう。1815 年にはイエーナ大学で新たな学生組織であるブルシェンシャフトが設立され、『『名誉・自由・祖国』をスローガンに』<sup>12</sup>大学生の革新を訴えはじめると、この集団はまたたく間にドイツ中の各大学に広まっていったのである。

その後の対ナポレオン戦争の勝利とそれにつづく政治的反動期において学生たちの活動は下火になることはなかった。むしろフランス革命以降の自由への期待が裏切られたことにより、大学生はもとより大学教授や文学者といった〈教養を身につけた〉人びとには政府に対する失望と不満が高まっていった。政治的反動に息詰まった雰囲気を一気に吹き飛ばす転機となったのが 1819 年に起きた作家コツェブーの殺害事件だった。ハイデルベルク大学のブルシェンシャフトの一員だった学生ザントが、ロシアに情報を漏らすスパイであるとしばしば噂されていたコツェブーをマンハイムの自宅で刺殺したのである。この事件を機にプロイセン政府はブルシェンシャフトの組合員はもとより、反動に不満をもつと疑われた知識人や民主主義者、愛国主義者などを「煽動活動家」(Demagogen)と呼び、彼らへの弾圧を一斉に始めた。<sup>13</sup>

ホフマンが文学作品を発表していたころのドイツの大学と大学生の実情は、およそ以上のようなものだった。歴史や政治の背景と平行するように、ドイツの近代大学と大学生の状況はめまぐるしく変わっていった。その変容ぶりをより細かく調べていくことは本稿の目的ではない。しかし、この複雑な背景のもとで、大学生が思想や活動において正反対ともいえる方向性をもったさまざまな人間の集まりであったことが鮮明になるだろう。十八世紀からの伝統的な大学生像が伊達者、あるいは愚連隊のような粗暴な集団であり、その

---

語部会『帝京大学外国語外国文学論集』第 13 号, 2007, 93~125 頁] 95 頁。

<sup>9</sup> 生松敬三：ハイデルベルク（講談社）1992, 106 頁参照。

<sup>10</sup> ザフランスキー：ロマン主義（法政大学出版局）2010, 24~25 頁参照。

<sup>11</sup> フィッシャー, 前掲書, 99 頁参照。

<sup>12</sup> 生松敬三, 前掲書, 105 頁。

<sup>13</sup> Vgl. Rüdiger Safranski: E. T. A. Hoffmann. Frankfurt am Main (Fischer Taschenbuch), 2000, S. 455- 457.

血気あふれる行動力は解放戦争から反動期にいたるまで受け継がれていた。その一方で、彼らが属する大学という機関は人的陶冶をめざすとともに、国家の支えとなるような専門職の養成機関であり、官僚という国家秩序の担い手を生み出すエリートたちの出身母体でもあったのである。一方でナショナリズムに殉じて国家の変革を企み、他方でその変革に抗する国家権力側のエリート候補生でもあった当時の大学生は容易にまとめることのできない、混沌とした集団であったともいえる。

ホフマンが作品中に盛んに大学生を採りあげていることをどう解釈するか考える際に、まず、彼がどれだけこの実情を知っていたのか、というのが大きな問題である。そこで手始めに一般的な大学生像の書かれた一場面を見てみたい。ホフマンのメールヒェンの一つ『ちびのツァヘス、またの名をツィノーバー』(*Klein Zaches genannt Zinnober*)(1819) (以下『ツァヘス』と略記)には、大学を擁する架空の国家ケレペスが登場し、そこを訪れた学者が大学生のいたずらめいた歓迎をうける場面がある。

そのとき、彼らがわたしのまわりに集まってきて、ひどく荒々しくこう叫ぶんだ、「俗物め—俗物め！」—そして、突然、身の毛もよだつような笑い声でゲラゲラと笑い出したのだ。

Da versammelten sie sich um mich her, schrien ganz gewaltig: ‚Philister – Philister!‘ – und schlugen eine entsetzliche Lache auf. (SP 21)

「俗物」は当時の学生用語では大学生でない者をさし、そこから転じて教養のない俗物的市民を意味するようになった言葉である。<sup>14</sup> 学生にとっては日常語であるが、一般には聖書に出てくる「ペリシテ人」という意味でしかない。その上、その言葉を面と向かって相手に脅かすように浴びせ、最後には自分たちだけ満足して笑い飛ばす。はじめてであった人間に対する礼儀など一切ない。それに対してひどく腹を立てた学者に、学生たちが次に行ったのは、手持ちのパイプを全員で吹かして学者の顔に煙を吹きかけるという行為だった(SP 21)。このあと物語の語り手は、世間知らずの学者が気づかなかったことを説明したうえで、この無礼なわかものたちが、講義が終わって気晴らしにいく学生の一団だったことをはじめて明らかにするのである。

この場面に出てくる学生たちは、すでに述べた解放戦争以前の、悪事を働くことで自己満足しようとする粗野な大学生の姿とまさに一致している。この場면을例にとれば、自身も一度は学生時代を体験したホフマンが、一般に流布する大学生像を十二分に把握していたと断言できるだろう。加えてホフマンは、このような一般像だけでなく、反動期の過激な大学生たちの活動について職務上、細かなところまで知り得ていた。1816年にベルリン

<sup>14</sup> Vgl. Hartmut Steinecke: Kommentar. In: E. T. A. Hoffmann. Sämtliche Werke Band 3, hrsg. v. Wulf Segebrecht u. Hartmut Steinecke, Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker), 1985, S. 1090.

大審院判事に登用された彼は、1819年に、コッツェブー殺害事件以降の「煽動活動家」たちを法的にどう扱うか審理する「大逆的結社活動ならびにその他危険な策動糾明のための直属調査委員会」(eine(r) Immediat-Untersuchungskommission zur Ermittlung hochverrätherischer Verbindungen und anderer gefährlicher Umtriebe)<sup>15</sup>のメンバーに選ばれた。この委員会での仕事をとおして「煽動活動家」の行動、言動につぶさに目をとおしたうえで判決を出しており、ブルシェンシャフトの活動についても詳しい知識を持っていた。

これだけ触れることが多ければ、ホフマンの詩的想像力を大学生が刺激したのかもしれない。しかし、その一方で大学生という存在はその特殊性によって目立ってはいないものの、その絶対数はきわめて少なかった。ホフマンの時代と若干相違するが1830年からドイツ統一までの約40年間にドイツの学生登録数は一万数千人の水準で安定しており、同世代の総数の約0.5%にあたった。<sup>16</sup> この数値でいえば、大学生はきわめて少数の集団である。しかしホフマンは、その大学生をメールヒェンと名づけた作品の主人公に敢えて集中的に取りあげている。時代背景を加味すれば、アクチュアルな時代を映す手段の一つとしてホフマンは大学生をとらえていたのではないだろうか。

## 2. ホフマンの作品内における大学生像

実際の大学生についてまとめたところで、文学作品では当時、大学生がどのように扱われていたか考えると、これは限られた紙面で説明するのはむずかしい。どの作品にどのような大学生が登場しているのかを逐一確認するのは筆者の手にあまる。そこでまず、若者にその枠を広げてから、ホフマンの大学生に輪郭をしぼってみたい。

当時の若者に大きな影響を与えた作品といえば、ゲーテの『若きヴェルターの悩み』(*Die Leiden des jungen Werthers*)(1774)を見過ごすことはできないだろう。疾風怒濤という文学史上のセンセーションを巻き起こしたこの作品は当時の若者をまたたく間に魅了していった。その影響力はすさまじく、実際に自殺をする若者まであらわれた、というのは象徴的な逸話である。<sup>17</sup> では、その主人公であるヴェルターはどのような人物だったのか。作中では「公使」(der Gesandte)<sup>18</sup>のお供として仕事をしており、水準以上の教養を身につけていることが暗示されている。この作品が作者の私小説的性格をもっていることを考慮すれば、ヴェルターがおそらく大学を卒業した官吏であると推測できるだろう。

作品でのヴェルターの自殺やその後追いは、当時の若者たちの熱狂的な性格と同時に、若者特有の未熟さ、拙速さを示しているかもしれない。また、すでに述べた実際の大学生

<sup>15</sup> Safranski: a.a.O., S. 455. 尚、ここでの役職名は次の訳文を参照した。(識名章喜訳) : E. T. A. ホフマン (法政大学出版局) 1994, 505 頁。

<sup>16</sup> 野田, 前掲書, 34 頁参照。

<sup>17</sup> 竹山道雄: 解説, [ゲーテ (竹山道雄訳): 若きヴェルターの悩み (岩波書店) 1994 (第62刷) 所収] 212 頁参照。

<sup>18</sup> ゲーテ, 同上, 55 頁。

像からは彼らの過激さ、乱暴さ、あるいは向こう見ずな未熟さばかりが目につく。ホフマンの大学生、特に学生組合員に対しての見解もまた、このような若者たちと重なっており、辛らつであったようである。直属委員会のメンバーだった前後の彼が、友人ヒッペルに宛てて書いた手紙の「強い調子の箇所」(starke Stelle)<sup>19</sup>には、過激な学生たちへの批判が書かれていたらしい。

間接的な証言からはホフマンが学生たちを含む煽動活動家周辺の出来事を文学的に扱おうと計画していたことがうかがえる。1820年にホフマンに宛てられた知人ローベルトからの手紙には、「約束したメールヒェン」(das versprochene Märchen)について「ハレゴリーシュでイェナローギッシュに」(Hallegorsich und Jenalogisch)描かれた内容に富む作品を期待する旨が記されている。<sup>20</sup> この造語はもちろん、当時すでに悪名高かった学生組合の中心地と思われていたハレとイェーナへの当てこすりであり、ホフマンが知人たちにそのような暗示を行っていたことをうかがわせる。またホフマンの執筆した最後のメールヒェン『マイスター・フロー』(Meister Floh)(1822)の検閲削除事件の原因の一つは、ホフマン自身の口の軽さにあったといわれる。作者自身が、行きつけである『ルッター・ウント・ヴェーグナー』で前もってすでに余計なことまでべらべらしゃべって」(bei „Lutter und Wegner“ zuvor schon zuviel ausgeplaudert)<sup>21</sup>その内容を言いふらしていたのである。当時すでにホフマンの作品を評価していたハイネは、この検閲削除された『マイスター・フロー』の感想にまず、「煽動活動家の陰謀に関するような文は、その中に一行も見つからなかった。」(Keine Zeile fand ich darin, die sich auf die demagogischen Umtriebe bezöge.)<sup>22</sup>と不満を述べることから始めている。当時、ホフマンが煽動活動家とそれに類する大学生を作品に描こうとしていたことは周知のことだったと言えるだろう。このような間接的情報を通じて深田甫は「こうした社会情勢のうちにみられた学生の活動やデマゴグ狩りを文学上で扱おうとする計画は、おそらくすでに1820年の初めごろからホフマンの意中にあったものと考えられる」<sup>23</sup>という推測を行っている。状況証拠ではあるが、あながち間違いともいえないだろう。

しかし、ホフマンの作品に登場する大学生の個別例は、非難されるべき過激な若者たち、という像とは必ずしも重なっていない。

---

<sup>19</sup> E. T. A. Hoffmanns Briefwechsel, 2. Band, hrsg. v. F. Schnapp, München(Winkler), S. 263.

<sup>20</sup> Ebd. S. 235.

<sup>21</sup> Safranski, a.a.O., S. 479.

<sup>22</sup> Heinrich Heine: Briefe aus Berlin. In: Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke. Bd. 6, hrsg. von M. Windfuhr, Würzburg (Hoffmann und Campe), 1973, S. 51.

<sup>23</sup> 深田甫：作品解題 [E. T. A. ホフマン (深田甫訳)：ホフマン全集 第九巻 (創土社) 1974 所収] 625 頁。

## 2.1 熱狂する大学生：『砂男』(Sandmann)(1815)と『王の花嫁』(Königsbraut)(1821)

すでに触れたように、大学生が登場するホフマンの作品は彼のメールヒェンに集中している。そしてこのメールヒェンは一般に考えられているような素朴な作品ではない。シュタイネッケは、ホフマンのメールヒェン群にイロニー、自己省察あるいはフモールといった複雑な修辭的、心理的技巧がほどこされている点、また各作品が本一冊となる分量をもっていることから、これらの作品を「メールヒェン・ロマン」(Märchenroman)<sup>24</sup>という作品群としてまとめるべきであると提案している。シュタイネッケの造語がどれだけ妥当であるか検討する必要はある。だがこの作品群には、素朴なメールヒェンとは対照的に多種多様な文学的要素が含まれているのは事実だ。そして、その結果としてあらわれるのは、登場人物とその生活に多くの文章を割くことによる複雑化である。これにより、人物の心理が掘りさげられ、人間の生が幅広く取り入れられることになる一方で、一般的な大学生像の枠を超えた要素がつけ加えられる。では、大学生がどのような視点から取り上げられているのだろうか。まず、二つの例を取りあげる。一つは、短編の物語『砂男』に登場するナターナエール、もう一つはメールヒェン『王の花嫁』のアマンドゥスである。

ところで、最初にあげる作品『砂男』は、メールヒェンとホフマンの大学生との関係を強調したにもかかわらず、メールヒェンには当てはまらない。この作品は『夜景作品集』(Die Nachtstücke)という作品集に収められている物語である。この作品集に収められているのは、実際にはありえないような出来事を伝える作品ばかりであり、その点でメールヒェンと似ていると言えるかもしれない。しかし、短編である以上、舞台は写実的現実世界であり、分量にも限界がある。なぜ、ここで『砂男』を挙げるのかといえば、その違いにもかかわらずホフマンのメールヒェンで扱われる大学生とある種の共通点をもっているからである。

『砂男』に登場する大学生ナターナエールの身に起こる出来事は、作品集に収められた不可思議な物語の典型である。彼は、あたかも伝説に出てくる妖怪〈砂男〉にも似た幻想的な人物コッペリウスとの出会いをきっかけに性格が一変する。それまで楽しい物語の才能に長けていたのに、「今や彼の作品は、陰気でわけがわからず、とりとめのないものだった」(jetzt waren seine Dichtungen düster, unverständlich, gestaltlos,...)(FN 347)と評されたひどい作品を、恥ずかしげもなく披露する。そして最後にコッペリウスの影にとらわれて塔から墜落死してしまう。その姿には、疾風怒濤時代のドイツの若者の熱狂的な気質が重なり、大学生という立場が時代背景をともなった説得力を与えている。

このナターナエールの運命をまったく裏返しにしたのがアマンドゥスである。彼もまた故郷の村を離れた大学生であり、主人公エンヒェンの恋人でもある。しかし、実際に登場するのは最後の場面だけであり、本文で扱われるのは、彼の書いた手紙と、語り手の伝え

---

<sup>24</sup> Hartmut Steinecke: E. T. A. Hoffmann, Stuttgart(Reclam), 1997, S. 165.



るコメントばかりである。そのコメントによれば、大学に入ってからのアモンドゥスは、勉強よりもむしろ詩作へと傾倒していったようである。彼の偏向ぶりを伝える「誰ともわからぬ者の手中に落ち」(Gott weiß wem in die Hände)(SB 949)という語り手の説明は、明確な責任者を明らかにしないという点で、『砂男』の幻想的な描き方と共通している。また、大学という場所が学生の熱狂を生み、促進させる点がここでも強調されているだろう。物語の結末では、アモンドゥスは自作の詩を歌い上げることで精霊を苦しめ、退散させてしまう。エンヒェンは精霊の恐ろしい手から解放され、二人は幸せな結婚生活を送る。

二人の人物像は当時の大学生を写實的に模写したとは限らず、詩作へ心を惹かれる姿が物語にあわせて変形を加えられているかもしれない。言いかえるならば、物語に合わせてデフォルメされている。しかしこの二つの作品が、熱狂する大学生を取りあげているのはたしかである。そして、それぞれの結末はその熱狂を基準にしてみた時、表裏一体の関係にある。

ナターナエールが書いた作品は、それによって恋人クララとの関係を良好にしようと欲していたにもかかわらず、よけいに彼女の不興をまねくことになる。アモンドゥスの自作の詩は、宮廷詩人として彼を採用した精霊を苦しめ、退散させることで彼の願いをあっさりとなげく。彼らが自分の望みに手をのばし、詩への熱狂に身をまかせることで、彼らの願望は遠のいていく。

その結果として訪れるのは対照的に極端な結末である。ナターナエールはクララを人形と思いこみ、彼女を突き落とそうとして墜落死する。この破滅的な出来事とはうって変わり、精霊を追いはらった後、詩作から古典へと興味の移ったアモンドゥスはエンヒェンと結婚する。それぞれの結末に対して語り手は〈結婚〉という共通項でまとめている。『砂男』は次のように締めくくられる。

ということで、クララは穏やかな家庭的幸せを手に入れたのだと言っていいのだろう。それは、明るく屈託のない彼女の性格にぴったりであり、内面のみだれたナターナエールでは決して叶えることのできない幸せだった。

Es wäre daraus zu schließen, daß Clara das ruhige häusliche Glück noch fand, das ihrem heitern lebenslustigen Sinn zusagte und das ihr der im Innern zerrissene Nathanael niemals hätte gewähren können. (FN 363)

「穏やかな家庭的幸せ」を築くことはナターナエールには不可能だ、と語り手は言う。『砂男』という作品だけに限って言えば、熱中する大学生への批判的な意見ともとれなくはない。それゆえに、決定的な運命なのだ解釈してもよいかもしれない。しかし、『王の花嫁』の「彼ら（アモンドゥスとエンヒェン——引用者注）はその後まもなく楽しく幸せな結婚生活をおくった」(Sie führten nächst dem eine glückliche vergnügte Ehe, [...])(SB 993)と

いう報告とならべたとき、ナターナエールの最期は、必ずしも必然的な答えではないのではないか。熱狂する大学生そのものが破滅的な道をたどるわけではない。彼らは多かれ少なかれ浮世ばなれし、突拍子もない事件を引き起こしはする。しかし、そのことが決まった結果を生むわけではないのだ。そう考えた時、ナターナエールの死は物語の目的というわけではなく、それほど重要なものではない。

さらに付け加えれば、一つの出来事として取りあげたときに短編にふさわしいナターナエールの物語は、この結末の部分によってその出来事の枠を超えていく。未熟な大学生としてナターナエールの姿を伝えるならば、彼の墜落死を伝えるだけで十分ではないだろうか。しかし、クララの未来の姿として「穏やかな家庭的幸せ」で終わる『砂男』は、ナターナエールへの皮肉を含んでいるとともに、ある種の人間的成長の必要性、あるいは人生への展望を提示する。それは、単に一大学生の不幸な事件というだけではなく、発展形成を前提とするロマンティックな性格に近づいているのではないか。そしてこの結婚という要素が、不幸で終わっているという点を除けば、『王の花嫁』も含めて、ホフマンのメールヒェン群とつながる共通点ともなっているのである。

## 2.2 大学生＝アウトサイダー：二つのメールヒェンから

前節の作品に登場する二人の大学生は地に足のつかぬ、浮世ばなれしたところがある。破綻した生活をおくるわけではなく、水準以上の人間関係を保ちながら、なんらかのきっかけで自身の熱狂を押さえることができなくなったのである。このような一部分を強調した大学生像に対し、メールヒェンに登場し中心的役割をなす大学生たちの場合、その生活全般が日常からわけ隔てられ、周囲の人びとの生活から見たときに違和感を与えてしまう。

ホフマンの最初のメールヒェン『黄金の壺』(Der goldene Topf)(1814)に登場する大学生アンゼルスはその代表例である。物語の冒頭で昇天祭のさなかに市場のかごに突っ込む不憫さが突発的な出来事ではなく、不運が彼のもとにとどまったままであることを彼自身が物語の早々に独白する。

しかし、憂鬱そうにぼんやりとながめながら、大学生アンゼルスはたばこの煙を宙にはき出した。するとむかむかした気分がついに収まらなくなり、しゃべり出した。

「ほんとうに、もう！ぼくはありったけ考えつきそうなだけの苦難をうけるように生まれついているんだな！

Aber finster vor sich hinblickend, blies der Student Anselmus die Dampfwolken in die Luft und sein Unmut wurde endlich laut, in dem er sprach: „Wahr ist es doch, ich bin zu allem möglichen Kreuz und Elend geboren! (FN 181)

この後、「ありったけの考えつきそうな苦難」というこれまでの、そして日常的に起こる

不運を長々と独白し、みずからの不幸な身をアンゼルスは嘆く。もちろん、彼のように不運が続くばかりであれば、このようにくさすのも仕方ない。だが、彼の不運へのうらみは、ただその出来事が起こることへの不満だけではなく、彼を救いようのない孤独感にさす。「自宅通学生」(ein Kümmeltürke)(Ebd.)<sup>25</sup>と烙印ともレッテルとも思える呼び名をつけられるように、他の大学生のような開放感を味わっているわけではない。それでも、祝日の今日ぐらいは他の学生のように粹に過ごしてみたい。それがどうしてこうなったのかと彼は続ける。

ぼくは、この楽しい昇天祭の日をのんびりと楽しむつもりだった、多少なりとも金も惜しまぬつもりだったのに。リンケ・バートではかの客たちがみんなやっているように、意気揚々と呼ぶことができただろう。『給仕さん—ドッペルビールを一つ—でも、とびきりのを頼むよ！』(中略) 結局、一人さみしく安たばこを楽しむしかない……  
Ich wollte den lieben Himmelfahrtstag recht in der Gemütlichkeit feiern, ich wollte ordentlich was daraufgehen lassen. Ich hätte ebensogut wie jeder andere Gast in Linkes Bade stolz rufen können: „Markör—eine Flasche Doppelbier—aber vom besten bitte ich!“— [...] nun muß ich in der Einsamkeit meinen Sanitätsknaster—“ (FN 182)

「ほかの客たちがみんな」やっていることを意識するように、ほかの誰かと自分をくらべ、同じように楽しむことがアンゼルムスの欲するところだった。しかし、現実にはそれがかなわないばかりか、「一人さみしく」だれもいない河辺でたばこをくゆらせるしかない。彼の不運は、ただ苦痛を与えるだけでなく、一般的な大学生が享受している楽しみを実行することもできず、孤立無援のなかで生きていくことを彼に強いるのである。

彼の身にふりかかる不運とそれによる失敗は、物語中でその後、詩人としての才能にかかわっていることだと明らかにされる。世間ずれしていない「子供のような詩的心情」(ein kindliches poetisches Gemüt)(FN 230)によって詩人は、日常の生活をおくっているときにはその能力を発揮することはできない。大学というシステムが主に高級官僚を生み出す役割を担っている以上、アンゼルスはエリート候補生である。「最高の学業成績」(die besten Schulstudia)(FN 203)を収めており、将来を嘱望されていたときもある。それにもかかわらず、彼のなかの詩的才能は社会における成功をかなえることはない。そのとき、幾ばくかの悲哀のただようアンゼルムスの葛藤がホフマン流のフモールを生みだしている。この大学生は、エリート候補生でありながら自己の特殊な才能によってアウトサイダーとなり、写実的現実において悩まなければならない詩人の姿を浮き上がらせている。

---

<sup>25</sup> „Kümmeltürke“は学生言葉において、大学から実家までが2マイル以上離れていない学生を指していた。Vgl. Wolfgang Kron: Anmerkungen. In: Hoffmann, Werke [Fantasie- und Nachtstücke]. S. 789.

アンゼルスに続く大学生はメールヒェン『ツァヘス』に登場する。架空の都市ケレペスの大学生バルタザルは 23, 4 歳と言われ、「品格ある、裕福な人びとの子」(anständiger, vermögender Leute Kind)(SW 23)である。彼もまた、アンゼルスと同様に詩的才能をもつ若者と判明する。友人の学生から「ふさぎ込んだ俗物のよう」(wie ein melancholischer Philister)(SP 23)だと形容される彼の振る舞いは、ほかの学生仲間から離れさせ、静かな森での散策へと追いやる。

しかしアンゼルスと違い、バルタザルが世間からはじき出される原因となるのは、詩的な才能によって起こる周囲との問題ではない。人びとからの賞賛と愛する女性カンディダを彼から奪うのは、妖精の力によって常に賞賛を一人占めにするこびとツァヘスである。そのため、ツァヘスを克服することでバルタザルは詩の能力を開花させるとともに、社会的地位をも確保する。彼はアンゼルスのような葛藤に悩まされることはない。

むしろバルタザルが直面するのは、詩作をすることの根にひそむ日常の生活との齟齬である。彼の詩作はカンディダへの恋心と直結している。その心情は彼のなかでは神聖で犯されざるべきものとなっていた。そのことを、森のただ中で独白することで彼は確認しようとした。しかし、そのあとで感じるのは妙な後ろめたさだった。

いまになってようやく彼は、自分が美しいカンディダを、いかに言葉にできないほど愛しているのか正しく感じとった。しかし同時にまた、十分奇妙なほどに、その最も純粹で誠実な愛が外面的な生活のなかで、なんだかばかげたものになっていくことも感じた。それはおそらく、自然があらゆる人間の活動に加えた深いイロニーのせいであろう。彼がそう感じたのはおそらく正しかっただろう。それにもかかわらず、まったく間違っていたことだったのは、彼がそのことについて怒り始めたことだった。そして彼をふだん包んでいた夢は消え失せていた。森から聞こえる声は、彼には嘲笑やあざけりの声のように響くのだった。彼はケレペスへと走って帰っていった。

Erst jetzt fühlte er es recht, wie unaussprechlich er die schöne Candida liebe, aber auch zugleich, daß seltsam genug sich die reinste innigste Liebe im äußern Leben etwas geckenhaft gestalte, welches wohl der tiefen Ironie zuzurechnen, die die Natur in alles menschliche Treiben gelegt. Er mochte recht haben, ganz unrecht war es indessen, daß er sich darüber sehr zu ärgern begann. Träume, die ihn sonst umfingen, waren verloren, die Stimmen des Waldes klangen ihm wie Hohn und Spott, er rannte zurück nach Kerepes. (SP 29)

バルタザルがカンディダへの崇高な思いをどれだけつのらせようと、その思いは彼の生活のなかでは必ず「なんだかばかげたもの」となってしまう。この内と外のずれをバルタザルは解消することはできない。すると今度は、今まで彼の内面をいやしてくれていた森の静けさがあざけりの声へと変わってしまうのである。バルタザルが直面したこの危機は、

どちらかと言えばアンゼルスよりも、熱狂する二人の大学生に近い。森の静けさと美しい女性をこよなく愛する彼は、熱狂するロマンティカーとなる。その熱狂はしかし、彼の実際の生活に役にたたないどころか、彼を滑稽な道化へと変貌させるのである。

アンゼルスの場合、この危機との直面は回避されている。彼はドレースデンから姿を消し、精霊の住むアトランティスへと移り住む。その一方で、バルタザルはこの危機を詩人としてはっきりと解決することはない。物語ではアンゼルスをなぞるように詩人となった彼のその後が語られている。

バルタザルは、プロスパー・アルパヌスの教えを心に刻み、驚嘆すべき別荘を所有していることをおおいに利用しながら、実際によき詩人となった。

Balthasar, der Lehren des Prosper Alpanus eingedenk, den Besitz des wunderbaren Landhauses wohl nutzend, wurde in der Tat ein guter Dichter, [...] (SP 100)

バルタザルは師の教えを守り、師の残してくれた不思議な別荘をみずからのものとした。だがそれらの力は、果たして内面の詩的心情と日常の生活のあいだにある齟齬を解決できたのだろうか。別荘はたしかに不思議な力を宿しており、メールヒェンにふさわしい超常的な能力をバルタザルに与える。しかし、その力はメールヒェンの空間と同時にあり続ける写実的現実を完全に塗りかえるほどの影響力をもってはいない。ということは、アンゼルスとは違い、バルタザルは世界から消えてしまうわけではなく、その後も生活したことを意味している。それは決してバルタザルの詩的な才能と、日常における熱狂を調和的に結びつけたことにはならない。

『ツァヘス』では完全なハッピー・エンドを迎える。それはメールヒェンという形式から考えれば、伝統的なメールヒェンの系譜をひく作品とみなすことができるだろう。しかし、形式にふさわしいというのであれば、それは同時に、そうあらねばならない作られた結末であるということでもある。そして、この作られた結末の完全さはイローニッシュな語り口を拭い去ることはできない。<sup>26</sup> バルタザルは、皮肉めいた雰囲気を持たせただよわせた「よき詩人」なのである。

### 3. まとめ——ホフマンの大学生が向かう方向性

以上、主に十九世紀初頭のドイツの大学生像と、当時発表されたホフマンの作品に登場する大学生像を平行してまとめ、その関係を論じてきた。十八世紀から十九世紀にかけての大学は、政治的に不安定ななか、新しい力を求め大きな改革期を迎えていた。中世以来

---

<sup>26</sup> 拙論：「愉しく、望ましいおしまい」は訪れたのか——E.T.A. ホフマンのメールヒェン『マイスター・フロア』の結末詩論 [広島独文学会『広島ドイツ文学』第 25 号, 2011, 1-16 頁所収]10-12 頁参照。

の伝統的で偏狭な学問だけではなく、より完成された人格をめざす「教養」理念を取り入れ、学問に総合的に取り組むすぐれた学生を育てることを目標にかかげたのである。その一方で、領邦国家の支援によって成り立つ大学は、功利主義的な要求に答え、高度な専門職である高級官僚や医師、聖職者を養成する教育機関としての性格もそなえていった。

この大学改革がおこなわれた時期に平行して、ドイツの大学生には歴史の表舞台にあらわれる転機が訪れた。それまでは一般に、粗野で乱暴なイメージに固められていた大学生たちは、フランス革命につづく解放戦争をとおしてドイツ的ナショナリズムに強く感化されていった。その時期に結成されたブルシェンシャフトは、政治的反動に対する不満から、血気盛んな反政府的な運動へと転化していった。その一方で、大学が国家を支える人材を供給する機関である以上、その中から政府の力となる人びとが輩出された。当時の大学生は、正反対の方向性をもった者たちが混じり合う特殊な集団であった。

ホフマンはみずからの経験から、あるいは職務上知りうる情報からこのような大学生の実情にかなり精通していた。ホフマンの大学生像の一つは、疾風怒濤時代から注目されてきた熱狂する若者としての大学生である。その熱狂は彼らを浮世ばなれし、偏狭した詩作へと駆りたてる。その情熱はゆがんだ人格を生み出す時があり、破滅的な結末を迎えることもある。しかし、その破滅をしめすことがホフマンの目的ではないだろう。むしろ、熱狂的な気質をもつ大学生であるがゆえに、日常のなかに生活する不安定な人間像の好例として扱われている。

さらに、ホフマンがメールヒェンの中心人物としてつくり出した大学生について述べた。彼らは、熱狂する大学生よりも日常生活から隔離されている。その原因は彼らの詩的才能に由来する。エリート候補生でありながら社会的に評価されない場合、詩人としてアウトサイダーに徹するか、あるいは生活するなかで熱狂する姿をさらし、滑稽な存在であることを認めなければならない。

以上がホフマンの作品に登場する大学生像である。その像はずいぶんと矮小な存在にとどまっており、行き詰まりを感じさせる。しかし、ホフマンの大学生は、現実の若者たちと同様、まだ完成された存在ではないように思われる。例えば、ホフマンのメールヒェン『マイスター・フロー』に登場するペレグリーヌスは、アウトサイダーとして日常から消え去ったアンゼルスと同様の経歴をもっている。当時の煽動活動家事件の背景を組み入れようとした点を加味すれば、ホフマンの大学生は『マイスター・フロー』についての新しい考察の手がかりともいえる。そして、そのまま消えることなく再び写実的現実に戻帰するペレグリーヌスの姿は、ホフマンの皮肉のこもった語りの洗礼を受けながらも、ささやかな希望と再生のための力強さを結末で見せる。そこには、未だ完成しない未熟さを補填し新たな視野を拓く可能性を見いだすことができる。その点で、ホフマンの作品における大学生像をより鮮明に考察し、特徴づけていくことは、『マイスター・フロー』並びにホフマンのメールヒェンについて研究する際に、多くの有意義な示唆を与えるにちがいない。

## Die Studenten in den Werken E. T. A. Hoffmanns

Hajime OZAKI

In diesem Aufsatz geht es um die Studenten, die in E. T. A. Hoffmanns Werken, besonders in seinen Märchen, auftreten. Bei seinen Vorgängern (z.B. Goethe, Novalis, Tieck usw.) war die studentische Figur nicht so populär. Dagegen behandelt Hoffmann sie vergleichsweise öfter, mehrmals wählt er sogar einen Studenten als Hauptfigur (z.B. Anselmus, Nathanael und Balthasar).

Die Zeit um 1800 war eine bewegte Epoche, die deutschen Universitäten wurden damals reformiert: ein typisches Beispiel ist die Universität Berlin. Dabei wurde „Bildung“ als Prinzip bei der Gründung bzw. Reformierung an die erste Stelle gesetzt, aber auch im Sinne des gesellschaftlichen Nutzens wurden Ausbildungsinstitutionen, vor allem medizinische und juristische Fakultäten, errichtet. Diese beiden Auffassungen waren die Fundamente, auf die man die Universitäten mit der Absicht gründete, der Gesellschaft die nötigen Bildungseliten zu verschaffen. Damals standen die deutschen Studenten auf der Bühne der Geschichte. Im 18. Jh. hatten sie noch den Leumund, sich nur unhöflich und keck zu benehmen, doch das Ende des Heiligen Römischen Reichs stärkte den aufkommenden Nationalismus, so dass viele Studenten am Freiheitskrieg teilnahmen. Entgegen den Erwartungen vieler Intellektueller und studentischer Burschenschaften kam danach die Zeit der Reaktion. So begannen einige von ihnen, sich als Systemgegner zu betätigen.

Hoffmann kannte die Lebensweise der Studenten aus eigener Erfahrung und war als Richter ex officio über ihr Treiben informiert. Davon abgesehen hat er die studentischen Figuren frei gestaltet. Dabei werden sie aber nicht einfach nur kritisiert. Einerseits ist Nathanael in „Der Sandmann“ ein enthusiastischer Student. Er wird von einer dunklen Ahnung verfolgt und stirbt durch einen Sturz von einem Turm. Andererseits ist der Student Amandus in „Die Königsbraut“ ein begeisterter Dichter. Er vertreibt mit seinem Gesang einen bösen Gnom, obwohl er gar nicht so recht an die Wirkung glaubt, und rettet damit seine Freundin Ännchen. Natürlich sind diese beiden begeisterten Studenten durch die Darstellung Hoffmanns stark deformiert, doch es werden eben die zwei Seiten ein und derselben Medaille gezeigt. Amandus' Gedicht zerstört im Märchen seinen Wunsch, Hofdichter zu werden, bringt ihm aber Glück in der Wirklichkeit, das heißt, die Figur parodiert Nathanaels Tod, der für Hoffmann kein auswegloses Schicksal bedeutet.

Im Vergleich zu den anderen Erzähltexten werden die studentischen Hauptfiguren in den Märchen als Außenseiter beschrieben. Der Student Anselmus in „Der goldene Topf“ kann das studentische Leben nicht genießen, und im bürgerlichen System, in dem nur Nützlichkeit zählt, findet er keine Anerkennung. Seine Erhebung zum Dichter verrät nicht nur die Sehnsucht, sondern auch den

Zweifel des Erzählers. Im Märchen „Klein Zaches genannt Zinnober“ ist der Student Balthasar ein Sohn „anständiger, vermögender Leute“. Er erfährt als Dichter am Ende ein vollständiges Happy End, sodass seine Entwicklung kunstvoll ironisiert wird. Peregrinus in „Meister Floh“ ist schon kein Student mehr, er hat sein Studium in Jena abgeschlossen und sich aus der Öffentlichkeit zurückgezogen. Man kann diese Situation so verstehen, dass Anselmus, nachdem er Dresden verlassen hat, wieder in die realitätsbewusste Welt hineingezogen wird. Darüber hinaus findet er im Leben, das nur oberflächlich als Komödie erscheint, wieder Kraft zum Neubeginn, doch das Ende ist durch den Erzähler so märchenhaft ironisiert wie auch bei der Figur des Balthasar in „Klein Zaches“.